

# 『蝶々夫人』に観る3つの時代

## ヨーロッパで活動の巨匠演出家 83歳の日本デビュー

全国共同制作オペラ「蝶々夫人」の演出を担当し、長年フランスで活動する笈田ヨシ氏が来日。音楽評論家であり、オペラ台本作家でもある響敏也氏が話を訊いた。

お話

おいだ  
**笈田 ヨシ**

(俳優・演出家)

×

聴書き

ひびき  
**響 敏也**

(作家・音楽評論家)



(c)Takashi Iijima



笈田ヨシ (おいだ よし)

1933年神戸市出身。文学座、劇団四季を経て、1968年にロンドンでピーター・ブルック演出『テンペスト』に出演。以後、活動の拠点をヨーロッパに移し、日本を代表する演劇人として世界各国で活動。『WASABI』(2001年)、『最後の忠臣蔵』(2010年)、『ラストレシビ〜麒麟の舌の記憶〜』(2017年公開予定)など映画にも多数出演。2013年フランス文化勲章受章。

劇聖シェイクスピア(1564~1616)は、こんな言葉を残している。

「人は誰もが役者、世の中は舞台。そこで自分という役を演じているのだ」

この名言を、そのまま自分の人生で実践し続ける舞台人、それが名優にして名演出家の笈田ヨシ氏。1933年神戸生まれの83歳だが、50代でも通用する精悍な風貌、小気味よく飛び出す言葉に陽気な笑いがはじけ、いつの間にか周りに人の輪が出来ている。まさに人生の名優にして、練達の名演出家だ。

30代で欧州に渡り、俳優・演出家としての地歩を築いてきた。

### 幼少から芝居を生きる

**響** お小さい頃から芝居に夢中だったと伺いました。幼い子が芝居見物を?

**笈田** 新開地です。新開地で、剣劇や大衆演劇、歌舞伎とか、片っ端から観ましたね。子供ひとりで行くわけにいけないのでお手伝いさんが付き添い。母親は学校へ電話です。「うちの子が熱を出しましたので、お休みします」って。

**響** それじゃ、しょっちゅう熱を出したんですね(笑)。すでに「お芝居」だ。

**笈田** 学校は通わずに新開地通い(笑)。

それで大学時代(慶應)も演劇に熱中です。父が自転車を作る会社をやってまして、ひとしきり演劇やったら、あとは社長を継ぐと決まっていたんですが、26歳で父を亡くしました。会社もなくなって。私には演劇しかすることがない。みんなに「才能ないからやめろ」と言われながらの役者暮らしでした。でも自分で「確かに俺は凡才だな」と自覚した頃から、急に良い評判を頂くようになって。やっぱり自分を知ると強いですね(笑)。

### パリの街角で涙する

**響** 欧州が、活動の地盤へと移行してゆく経緯は、どんなふうには?

**笈田** 35歳のとき、仏文学の鈴木力衛(1911~1973)さんから「ピーター・ブルック(1925~)がパリで実験演劇をするんだが、日本人の役者が要ると言ってきた。お前、行くか」と勧められて。そりゃ当時は外国へ行くのが珍しい頃ですからね。それを、ただで外国へ行けて、芝居の勉強が出来て、そのうえ給料がもらえる、なんて。こんなうまい話はないですから、喜んで受けました。そこで、パリに着くと絵葉書で観たような景色のなかで、涙を流して…。

**響** 初めてのパリに感激なさって、

**笈田** いや違うんですよ、あの頃(1968年)5月革命かなんかで、民衆と権力側が対立してまして。それで催涙ガスが強烈で涙が(笑)。

そんな混乱もあって、仕事らしい仕事もせずに帰国したんですが、39歳で再び渡欧しまして、それからはずっと欧州と日本を行き来する生活です。

欧州では役者としても演出家としても、もう長いんですが、日本では役者だけで長くやってきました。それは私自身、演出家としてはお客様が入らないような芝居ばかりに挑戦してきたことが大きいでしょうね。だから人気あるオペラよりも、マーラーの『大地の歌』やシューベルトの『冬の旅』なんかを、本来の歌曲集としてではなく演出を入れた形で上演したり。ところが自分でも不思議なんです、61歳ごろから趣味が変わったというか、それまで距離があったオペラの仕事を始めます。歳を取って細胞が先祖返りしたのでしょうか。新開地で観た歌舞伎などの出し物が蘇ってきました。内容的にはオペラと相通じるものですからね。

# 蝶々夫人



## 83歳の演出家デビュー

**響** こんどは、プッチーニのオペラ『蝶々夫人』の、日本各地での連続公演の演出をなさいます。これまで日本では、演劇やオペラの、どんな作品の演出を？

**笈田** いやいや、日本で演出の機会を頂くのは、これが初めてなんです。

**響** ええっ?! ってことは、もしかして演出家としての笈田ヨシさんは、これが日本デビューでしょうか？

**笈田** その通りです! 新開地の記憶から70数年、ついに日本で演出家デビューを飾れます(拍手)。

**響** プッチーニの『蝶々夫人』は、これまでに演出なさったことは？

**笈田** こんどの舞台の原型となる公演をスウェーデンのエーテボリでことし2月から5月の間に計22回やりました。連日満席で、なかには入れなくて帰ったお客様もあったようです。それをもとに、さらに改良した舞台を創ります。

## 蝶々の心の救済を

舞台を鑑賞した人からの噂が噂を呼び、それが拡散・拡大してゆく。やがて独自の視点を持つ鮮烈な「笈田オペラ」の演出境地が観え隠れしてくる。

プッチーニ渾身の歌劇『蝶々夫人』は、決してスペクタクルでも歴史活劇でもないし、もちろん甘ったるい恋愛物語でもない。『蝶々夫人』には心理劇の性格がある。寄港地での恒例で、気晴らしの娯楽に結婚ごっこをしてみただけの米士官ピンカートン。それを知らずに真実の恋、真実の夫と信じて待ち続ける蝶々さん。

この2人の、現実の舞台では見えない人間関係が綴られてゆく、と考えるもいいだろう。その心理劇のなかに、笈田氏はいくつかの時代の層を観る。蝶々さんのモデルになった実在の女性「つるさん」の時代(明治維新前後)、半世紀後の1920年代の日本(笈田氏がオペラで想定する時代)、そして終戦直後に笈田氏自身が体験した、日本中がアメリカになびいていた時代。

**笈田** この歌劇は第2幕以降が大変に良く出来ています! 心理描写と内面の動きがドラマを創って行く。これは大人の心理劇としての要素が大きい。

太平洋戦争後の世論とモラル、教育現場の混乱。それぞれが悩みに悩み、苦しみました。日本とアメリカのあいだに身を置いて、ただひとりで悩み、追い詰められてゆく蝶々さんは、ある意味では終戦後の日本人の幻影です。すべてがアメリカになびいて、日本人の基本姿勢が脆くヤワだった時代です。「あの人は私の夫なんだから帰ってくる、きっとあの人は帰って

くる」…と歌うアリアは、同じ舞台のスズキに歌っているのではなく、何だか蝶々さんが自分自身に、言っていて聴かせるように聴こえますね。じつは蝶々さんは、偽りの夫が、もう帰って来ないと悟っています。それでも希望を見詰め続けようとしている。

**響** その角度から聴くと、あの歌が、より深くなりますね。

**笈田** そこになんと、艦船の入港を知らせる合図の大砲が轟く。しかしピンカートンは、我が家に帰って来たのではなく、かつての愛人の蝶々さんに用事があるって訪ねてくる。生まれた子供をアメリカに連れて帰るといふ。アメリカの教育を受けさせるわけですね。蝶々さんは苦しみつつも、子どものためを思えばアメリカの教育を選ぶのが母親の務めだと心を決める。しかし残された自分は、アメリカ男に弄ばれただけだと思ひ知る。ピンカートンはアメリカで「本当の結婚」をして、無神経にも、その妻を連れて来ている。蝶々さんは自分の愛情が踏みにじられたのを知ります。

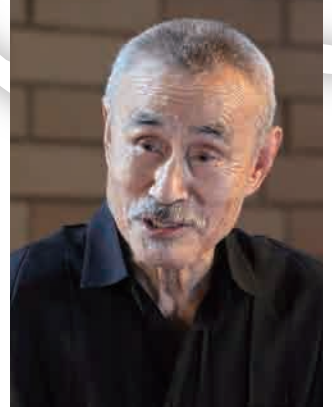
**響** 日本女性として、このままでは生きていけない。

**笈田** 蝶々さんは、父が切腹した刀に彫ってある銘文を読みます。「恥に生きるより、名誉ある死を選べ」と。

この場面が来て、蝶々さんが舞台上で死ぬのは、物語を浅くします。私の演出では死んだのか、あるいは、そうじゃないのか、それはお客様の心のなかの舞台上で上演して頂きましょう。

必ず愉しんで頂ける舞台に、さらに考えて頂ける舞台にします。

**響** 待ち遠しい想いです。ありがとうございました。



## プッチーニ 歌劇「蝶々夫人」

《新演出》全幕・日本語字幕付原語上演

2017年1月26日[木] 18:30

10月10日(月・祝)

一般発売開始